



令和2年度

自然を活用した東京都版保育モデル 活動報告書

令和3年3月



東京都福祉保健局

－ 目次 －

1. 事業概要	2
1.1. 事業の背景・趣旨	2
1.2. 事業実施概要	5
1.3. モデル事業の進め方	9
2. 参加園でのモデル事業実施	10
2.1. せせらぎ保育園	10
2.2. まちの保育園小竹向原	16
2.3. 本村保育園	22
2.4. 令和元年度事業の効果検証	32
2.5. モデル事業を通じての考察	38
3. 活動報告会の開催	43
3.1. 活動報告会概要	43
3.2. 各園からの活動報告	44
3.3. パネルディスカッション	47
3.5. 参加者アンケート結果	50
4. モデル事業を踏まえたまとめ	52
4.1. モデル事業の成果・課題	52
4.3. 自然を活用した保育のさらなる促進に向けて	53
【参考】 有識者会議の構成メンバー・開催概要	54

1. 事業概要

1.1. 事業の背景・趣旨

事業検討の背景

- 東京都は、待機児童の解消に向けて、都独自の整備費補助や都有地の活用等により区市町村を支援し、多様な保育サービスの整備を進めてきた。
- こうした取組により、保育サービス利用児童数は年々増加し、令和2年4月時点の待機児童数は前年から1,347人減り、2,343人となった。
- 保育の受け皿整備に向けた取組が展開される中、国をはじめ、保育の質の確保・向上に係る検討、取組が進んでいる。
- 保育の質を高めるための取組として、近年、自然環境を活用した保育への関心が高まっており、多様な取組が行われてきている。
- 東京都においても、東京ならではの自然環境を活かし、独自の保育モデルを検討、整備し、さらなる保育の質の確保・向上を目指しているところである。

モデル事業実施目的

- 自然の中での体験や自然環境を活用しての教育は、子供の主体性や想像力、思考力、コミュニケーション能力などに代表される非認知能力を養うために効果的であるということを踏まえ、保育所等において、自然を活かした保育活動を通じて幼児教育がさらに充実することを最終的な狙いとしている。
- 東京都の特性を活かし、より効果的な取組となるよう、東京都内の自然環境を活用して保育を行う東京都版モデルを作成することを目標として事業を実施した。

1. 事業概要

1.1. 事業の背景・趣旨

モデル活動を通じて効果的な保育モデルを検討、その普及を図る

- 自然を活用した東京都版モデルについて、モデル事業での活動、活動における効果検証等を通じて、効果的な保育モデルの検討を進める。
- 活動報告会、報告書の公表等を通じて、広く都内の保育所等への普及展開を図る。

自然体験、自然の中での活動を行うこと自体が目的ではない

- 保育の充実、子供主体の保育のさらなる実践等を狙って自然を活用するものである。
- 自然体験、自然活動をたくさん行うことを意図したものではない。
- 自然の特性を生かして、日常の保育をさらに有用なものとしていく、子供主体の保育のさらなる実践、非認知能力を養うこと等に役立てるための位置付けであり、園での通常の活動として自然を生かしていくことが肝要である。

東京都でもできること、東京都ならではの取組を模索する

- 比較的自然環境の制約がある東京都でも実践できる内容の検討に加え、東京都ならではの状況をうまく生かした取組についても模索。

1. 事業概要

1.1. 事業の背景・趣旨

自然の活用が期待される背景

自然を活用する主な狙い

「非認知能力を育む」こと

【幼児期に習得が期待される非認知能力の要素】

主体性

思考力

協調性

コミュニケーション力

問題解決力

自己管理能力

自己肯定感

探究心

共感性

道徳心

倫理観

規範意識

公共性

出所：一般財団法人日本生涯学習総合研究所「『非認知能力』の概念に関する考察」（平成30年3月27日）より

自然を活用する意義・意図

非認知能力は自然を活用しないと
育むことができないか？



自然の活用が必須ではない
(ほかのやり方でもできる)

ではなぜ自然活用なのか??



自然を活用することでより効果的に
非認知能力を育むことができる

それはなぜ??



自然の特性を活かした「遊び」等を通じ、
「集中」「没頭」も起きやすく、「気づき」を得やすくできる等の長所がある

1. 事業概要

1.2. 事業実施概要

令和元年度モデル事業で確認できた効果・成果

保育者の意識の変容、それに伴う子供との関わり方の変化がみられた

- 限られた期間ではあったものの、モデル事業を通じて、保育者側の子供への関わり方、接し方、安全対策についての意識の変容の兆しがみられた。
- 客観的に確認できるとともに、保育者との意見交換でも、考え方、意識が変わったという意見が挙げられており、意識変容のきっかけづくりに資する活動が展開できた。また、意識の変容を踏まえて、初回活動時と比較して、より見守りに徹するような子供との接し方への変化などもみることができた。
- これまで保育者として取り組んできたことについて、外部のアドバイザーから意見を得られたことで、自信を持って活動を進めることにもつながった。

子供たちの遊び方に変化の兆しがみられた

- 保育者側の接し方がより子供の主体性を引き出すものになりつつあることを受けて、子供たちの遊び方にも少しずつ変化が生じ、以前よりも没頭して遊びこむ様子や、独自の遊び方が生じるなど、様々な変化の兆しがみられた。
- 少しずつではあるが、遊びこむ様子が以前よりも増えてきていることから、今後、主体性、想像力、思考力などを育むための没頭、気づきにつながるような活動を行うことができた。

(一部ではあるが) 保護者・家庭での取組のきっかけとなった

- 保護者へのアンケート結果などから、モデル事業を踏まえて、家庭において、子供の遊びに関する希望や発言内容に変化がみられたという意見があった。
- 子供の希望を踏まえて、家庭でも自然を意識した取組を行ったという保護者もおられ、一部ではあるものの、家庭での活動を促進するきっかけにもなった。

1. 事業概要

1.2. 事業実施概要

令和元年度モデル事業における課題

モデル活動の実施時期・期間が限定された

モデル事業実施施設の所在地域が限定された

近隣の公園等の施設での活動がベースとなった

対象年齢が幼児に限定された

効果検証範囲にも制約があった

課題を踏まえて設定した令和2年度事業の取組概要

モデル事業の 拡大・深耕・多様化

昨年度同様の活動継続

より季節性を考慮した活動

都心部での実施

対象年齢の拡大

自然を活用した保育の 普及・啓発促進

普及・理解促進のための情報発信

自然を活用した保育に関する事例集の作成

人材育成・基盤整備

研修体系・プログラムの検討

効果の把握・検証

保育士の意識変化、それに伴う子供の様子の
変化の把握

子供の中長期的な変化・成長、日常への影
響の把握

1. 事業概要

1.2. 事業実施概要

自然活用を考える出発点



日常的・継続的に実施することが重要

- 数回の自然体験などで得られる効果は限定的
- 連続性のない取組よりも継続性を念頭に取組を進めることが重要
- 自然を活かした活動だけで考えるのではなく、園で実施しているほかの取組との関係性、連動も考慮して自然を活用した取組を進めて行くことも必要



やることを決めるのではなく、主体性を引き出すアプローチが重要

- 全員で同じアクティビティを行う必要はなく、子供それぞれの自主性や主体性を引き出すための工夫がより重要
- 何かを教えるのではなく、促し、引き出すためにはコーチング・ファシリテーション型の対応が求められる
- 保育者側の自然に係る体験・経験も重要な要素



保育者の意識を変えていくことも必要

- 保育者側の自然での体験、経験が少ないこともある
- 保育者の取組への理解を深め、経験を重ねることでより効果的な取組につながる
- 保育者の理解を深め、子供との関わりの意識等を変えていくことも重要

自然を活用するうえで大事なこと

✗ 豊かな自然、恵まれた自然環境

あるに越したことはないが必須要件ではない
自然の活用はあくまで手段

✗ 練り上げられたカリキュラム

自主性を重んじる工夫が重要
何かを覚える、同じことをするのが狙いではない

◎ しっかりとした目的の設定

何を実現するために自然を活用するか
そのために何をすべきかの設計

◎ 目的に照らして適切な環境と運用

環境づくりは工夫次第で改善可能
主体性・自主性を引き出すための工夫が大事

◎ 継続的・日常的な活動化

スポット的な活動では効果は限定的
園の通常活動に組み込む形で考えることが必要

◎ 保育者側の意識・経験

保育者の意識を変えることも必要
自らが経験しておくことも重要

○ 関係者の巻き込み、ネットワーキング

保護者やそれ以外の関係者の理解
地域での協力関係の構築

自然をうまく活用して多様な経験をしてもらうこと、気づきを得ることなどが狙い
自由な活動を促進するための基盤を作っていくことが重要

1. 事業概要

1.2. 事業実施概要

自然の活用に向けた留意点

自然の中で保育を行うことだけが目的ではなく、自然を活かして気づき等を促す“きっかけ”とすること

- ◆ 施設の考え方、方針や近隣の環境等も考慮して独自の取組を検討していくことが重要
- ◆ 自然の活用に一律の正解はない（モデル事業はあくまで一例）
- ◆ 活用方法は多様であり、自然豊富な公園や遠方での活動だけではなく、身近な自然にも気づくことが狙い

利用できる身近な資源を活かすこと、視野を広げて利用可能な資源を探すこと

- ◆ 公園でもできること、できないことがある
- ◆ 周辺環境で使えそうな場所はあるか、何ができるかを把握しておくことも大切
- ◆ 近所の神社や企業の庭園、道端の茂み、個人宅の樹木など、視野を広げれば活用できるものもある
- ◆ 近所に豊かな自然がないからとあきらめず、現状の環境で何ができそうか、という前向きな視点が重要
- ◆ （現時点では知らなくても）実は行政の支援があることも・・・
例：保育所の園外活動支援

保育に自然を取り入れたその先として改めて全般的な活動を考えること

- ◆ 自然を活用することを目的とするのではなく、自然を活用した保育が子供のどんな育ちにつながるのかを見据えるとともに、園内での活動など、多様な活動全体を俯瞰して考えて行くことが重要
- ◆ 自然を活用した取組が定着してくると、ほかの活動でも多様な気づき等が生じることも多く、単発の取組ではなく、保育全体の一環と位置付けることが期待される

自然の活用方法は多種多様
周辺環境・資源も考慮して各園にあった取組を進めることが大事

1. 事業概要

1.3. モデル事業の進め方

モデル事業実施の基本方針

園の日常的・継続的な活動として実施する

- スポットで実施するのではなく、園の日常的な活動として実践いただくことを支援する。
- 園の所在地近隣の自然のある場所（公園等）を主な活動拠点として継続した活動を実践する。
- 2～3か月程度の試行的な実践とする（以降、園で独自に継続できるように配慮）。

子供の自主性を促すため近隣の自然環境下で自由に遊ぶ活動を中心とする

- 自然環境下で子供の自主性、自発性が発揮されることを重視、決められたアクティビティを行うのではなく、環境を提供し、保育者によって自主性、自発性等を引き出すサポートがなされるように配慮する。

各保育所が実施している取組の一環としての自然の活用とする

- 自然活用は手段であることを考慮し、狙いに対して各園が実施している各種取組の一環として自然を活用することとする。
- 自然活用ありきではなく、自然という環境の特性を理解して、保育に活用するという前提を適切に伝えて行くように留意する。

保育者への情報提供等を実施、実践のポイントの共有を図る

- 現状、自然を活用した保育の実践は途上である園を対象としていることを考慮し、実施におけるポイント、留意点、推進方法等については情報提供等の支援を行う。

令和2年度モデル事業実施対象

		地域	
		都心	都心近郊～郊外
年齢	幼児	本年度実施 本村保育園（港区）	令和元年度実施 せせらぎ保育園（清瀬市） まちの保育園小竹向原（練馬区） 南千住七丁目保育園（荒川区）
	乳児		本年度実施 せせらぎ保育園（清瀬市） まちの保育園小竹向原（練馬区）

2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. せせらぎ保育園

基本情報

所在地	・ 清瀬市中里
運営主体・種類	・ 社会福祉法人、認可保育所
施設の規模 (年齢別人数)	0歳:15、1歳:18、2歳:20 3歳:22、4歳:22、5歳以上:23 計120人
周囲の自然環境	・ 清瀬市の住宅地の中の保育園。 ・ 近くには公園のほか、多目的グラウンド、雑木林、河原などがある。
事業開始前の自然を活用した保育の取組状況	・ 近隣の自然フィールドで、積極的に自然を活用した活動を実施している。 ・ 昨年度の活動以降、園児自身が自然フィールドでの活動に積極的になる様子が見られる。 ・ 今年度対象とする0歳児に関しても、バギーに乗っての散歩から、徐々に慣れたフィールドへの散歩、場所に慣れた園児は徐々にバギーやマットから降りての活動に誘うなどの働きかけをしている。

園の周辺環境

- 園庭の真ん中には木製の小屋のような形の遊具、滑り台がある。また、子供たちが走り回れる円形のスペースがあり、シャベルやバケツなど、子供たちが遊べる道具も用意されている。
- また、園庭には様々な高さの樹木を植えているほか、園の入り口のすぐ脇で亀を飼育している。
- 徒歩圏内に複数のグラウンドがあるほか、園の周りには田畑も広がっており、車の通らない田んぼ道など散歩に適した場所がある。
- 徒歩圏内に、子供たちが入って遊ぶことの出来る川（柳瀬川）があり、河原で様々な動植物に触れることも可能。

園庭の様子



園の外観



2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. せせらぎ保育園

モデル事業の対象

- 0歳児クラスを対象として実施。

モデル事業の実施概要

- モデル事業は、以下のスケジュール・内容で実施。

実施事項	日程	内容
事前打合せ	2020年8月27日	<ul style="list-style-type: none">・ 園長、担任保育士と実施対象、内容について事前打合せ。・ 現状の不安や取組における課題等についてすり合わせを実施。
活動同行 (第1回)	2020年11月19日	<ul style="list-style-type: none">・ 園周辺のグラウンド（中里グラウンド：徒歩15分程度）での活動に同行。・ 活動終了後、保育者との振り返りを実施。
活動同行 (第2回)	2020年12月11日	<ul style="list-style-type: none">・ 園周辺のグラウンド（中里グラウンド）での活動に同行。・ 活動終了後、保育者との振り返りを実施。
活動同行 (第3回)	2021年1月26日	<ul style="list-style-type: none">・ 園周辺の公園（みんなの広場：散策しながら30分程度）への散歩・活動に同行。・ 活動終了後、保育者との振り返りを実施。

事前打合せ

- 乳児を対象とした初めての取組となる事から、これまでの屋外における活動の内容や、外遊びにおける子供たちの様子、保育者が心掛けていることなどについて事前に聴取した。
- 昨年幼児クラスで本事業を実施しているほか、普段から散歩やフィールドでの活動を取り入れていることもあり、大きな懸念点はないことを確認した。

事前打合せでの主な意見

<自然を活用した活動に関する考え>

- ・ 月齢により発達状況が大きく異なるため、外でも個々の発達に合わせた活動を心掛けている。また、屋外に限ったことではないが、どんどん広がっていく子供たちの興味関心を阻害しないように接している。

<モデル事業参加に際しての不安や懸念>

- ・ 昨年度も他学年で実施しているため、大きな懸念点はない。
- ・ 乳児クラスはなんでも口に入れる時期でもあり、関心の芽を摘まず、安全に遊べるよう、適切な介入の仕方は日々考えている。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. せせらぎ保育園

初回活動の実施

- 初回活動は10月以降、涼くなってから数回出かけたことのある中里グランドへの散歩。9:30に園を出発し、2組に分かれて園児をバギーに乗せて、高月齢児で希望する園児は手つなぎ徒歩で、15分程度歩いて到着。
- 普段通りの活動を行ってもらい、公園での活動中の事業アドバイザーの関与は最小限とした。保育者の声かけの意図などを振り返り時に共有。

それぞれの遊びの展開と見守り

- 公園手前のエリアでシートに座って周囲を観察、シート近くで遊ぶ、斜面を何度も上り下りするなど、それぞれがやりたいことを見つけて活動。
- 保育者は子供たちが各々遊ぶ様子を見守りつつ、葉や草などの自然物を使い、遊びに参加。

シートの上で周囲を観察



徐々に行動範囲を広げていく様子

- 終盤は、これまでに行ったことのない、広場の奥の石段や葉の積み重なった公園など、関心を広げていく園児の姿も見られた。
- 石段を見つけてからは、石段の上り下りを繰り返す園児もいた。

石段を見つけて何度も上り下りする様子



活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。
- 自然の中での遊び方について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<保育者の関りについて>

- フィールドに慣れ、積極的に遊ぶようになっていた。石段の先の公園の存在に気付いたようで、園児たちが散り散りになってしまい、その対応に悩む点はあった。
- 興味関心を阻害しないようにしたい、と思いつつ、虫などを口に入れてしまわないか、つぶしてしまわないかという点が気になった。

<子供たちの様子について>

- のびのびと過ごせていた。他の人も公園内にいると人見知りをする子もいたが、今日は笑っており、場所に慣れたと感じた。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. せせらぎ保育園

第2回活動の実施

- 2回目も中里グランドへの散歩。9:30に園を出発し、2組に分かれて園児をバギーに乗せて、高月齡児で希望する園児は手つなぎ徒歩で、15分程度歩いて到着。
- 遊び始めて20～30分後、他園の幼児数クラスも公園を利用し始め、混雑したため、早めに帰園した。
- 帰園後、園庭で20分程度活動し、その後振り返りを行った。

それぞれの遊びの展開

- 前回活動以降も同じフィールドでの活動を重ねており、それぞれが好きな場所、好きな遊びを自ら展開していく様子が見られた。
- 葉をひたすらちぎり続ける、木の洞を枝でつついて観察する、斜面を何度も下りるなど、気に入った遊びをとことん続ける姿が見られた。

園児と保育者、園児同士のコミュニケーションの様子

- 道中や、グランドの到着後も、見つけたもの（木、葉など）を拾ったり、指さしたり、単語で保育者に伝えたりする様子が見られた。
- 他の園児のしていることをまねたり、葉を食べ物に見立てて手渡したりなど、園児同士でのコミュニケーションも起きるようになっていた。

活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。
- 自然の中での遊び方について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<保育者の関りについて>

- （基本的には見守っているが、前回課題となった階段や斜面での安全管理について）、前回公園に来た際に手すりを持ったり、座って下りたりする様子を保育者が見せたことを覚えていたようで、今回は自ら行うようになっていた。

<子供たちの様子について>

- 大人の手助けがなくても自分たちで遊びを見つけるようになってきていると感じる。
- 落ち葉を食べ物に見立てた遊び、木などの障害物を使用した「いないいないばあ」など、園児同士でも遊ぶようになっており、成長を感じた。

斜面を何度も上り下り



葉をちぎり他園児に手渡す



2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. せせらぎ保育園

第3回活動の実施

- 今回は別のグラウンドへの散歩。9:30に園を出発し、2組に分かれて園児をバギーに載せつつ、高月齢児で希望する園児は手つなぎ徒歩で、30分程度ゆっくりと歩いて到着。
- 帰りは低月齢時から先にバギーで帰園し、高月齢児は行きとは別の畑道で遊びつつ帰園。

畑道で発見や収集を楽しむ

- 道に落ちている自然物（どんぐり、茶の実、落ち葉など）を観察したり、拾ったりしながら散策。
- 未舗装の道であり、緩い傾斜や石などが転がっており、その凹凸のある道をあえて繰り返し歩き、足の裏の感覚を楽しむ様子も見られた。

広いグラウンドでの活動

- 広く、月山のような傾斜のあるグラウンドで、追いかけてこのように走る、興味の向く方向に歩き回る、手つなぎや伝い歩きをする、など、それぞれの発達に応じて活動を展開。

活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。
- 計3回の活動を通じた園児と保育者それぞれの変化について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<子供たちの変化について>

- バギーから降ろすと泣いてしまうような子も、泣かずに離れたところまで探索に行き、歩行を楽しんでいた。自ら自分たちで遊びを展開するようになった。
- 散歩中に目についたものを指さして教えてくれることが多くなり、成長を感じた。遊びを通じて、保育者や他園児とのコミュニケーションや、発語にもつながっていると感じる。

<保育者自身の変化について>

- 周辺に自然はあるが、これまでをあえて自然を活用するという視点がなかった。本事業に参加したことで、保育者自身も自然のことを意識するようになった。

どんぐり、茶の実などを拾う様子



でこぼこで斜めの道を歩いて楽しむ様子



広場にある緩やかな丘を上り下りする様子



2. 参加園でのモデル事業実施

2.1. せせらぎ保育園

モデル事業を踏まえた整理

- 本モデル事業を通じた子供たちおよび保育者の変化について、アドバイザーを交えてディスカッションを実施。主に以下のような意見があった。

子供たちの変化について

- 最初は散歩に行っても場所見知りをし、なかなか保育士のそばから離れられないこともあった子供たちが、徐々に外での活動に慣れて行動範囲を広げ、自ら自然物を使った遊びを展開するようになった。
- 発見したものを指さす、言葉で伝えようとする、保育者や他園児に手渡す、など、遊びを通じて言葉やコミュニケーションの面でも成長している姿が見られた。

保育者の変化について

- せせらぎ保育園は周囲の自然環境が比較的豊かで、それを当たり前環境として感じていたので、これまであえて「自然を活用しよう」と考えたことはなかったが、本事業を通じ、保育者自身が自然を意識するようになった。
- 外遊びの際でもマットの上でじっと座っている子がいても、周囲の自然環境を観察していたり、風や空気を感じていたり、その子なりの自然の楽しみ方をしているのだと捉えるようになった。
- より充実した活動を行うためにも、日々の子供たちの様子や発達状況、園周辺の活用できるリソース（散歩コース、広場など）などについて保育士同士で共有していくことの重要性を感じた。実際にクラス内では毎日数分間全員で情報共有をするようになったほか、園全体で「お散歩マップ」を作り始めた。

- 本モデル事業の最後に保護者に対してもアンケートを実施。次のような意見があった。
 - ✓ 体を動かしたり、近所の公園などに行きたがるようになった。「外に行きたい」と行動で示す（靴や上着を用意するなど）ようになってきた。
 - ✓ 室内で遊ぶ時よりも、外で落ち葉を踏んだり小石を集めたり、芝生の上を走り回ったりする方が楽しそうだと感じた。夜よく寝るようにもなった。
 - ✓ 動物や車、電車、木の実、落ちているものなど、興味の対象が増えた。また歩くだけでなく関心のあるものに向かって走る、指差しで教えてくれるようになった。
 - ✓ 家庭でも、公園などでの外遊びに積極的に出かけるようになった。
 - ✓ （両親が）広い公園、多くの体験ができそうな公園を探すようになった。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. まちの保育園小竹向原

基本情報

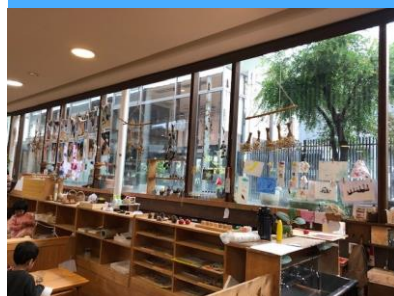
所在地	練馬区小竹町
運営主体・種類	株式会社、認可保育所
施設の規模 (年齢別人数)	0歳:6、1歳:12、2歳:14、3歳:16、4歳:16、5歳以上:16 計80人
周囲の自然環境	<ul style="list-style-type: none">練馬区の住宅地の中の保育園。近くには、住宅地の公園のほか、プレイパークや大きめの広場のある自然豊かな公園（城北公園、柿の木広場）がある。
事業開始前の自然を活用した保育の取組状況	<ul style="list-style-type: none">子供の主体性を重視した保育を実践している。毎日遊ぶ園庭には、固定遊具はなく、木登りできる樹木、築山があり自然素材を活用する工夫をしている。週1度程度、公園に散歩に出かけ自然環境を活用して遊んでいる。外で拾ってきた自然素材を基に制作を行うなど、園外での遊びと、園内での遊びが結びつくような工夫をしている。

園の周辺環境

- 250㎡の園庭には固定遊具は少なく、木登りできる樹木、木に縛ったロープや埋め込んだ丸太、流木、築山にマットや道具、自然素材等を組み合わせている。
- 近くには、徒歩10分ほどで、土を掘ったり、自然素材、道具を組み合わせ遊ぶことができる区立のプレイパーク（子供の森、3,000㎡）がある。
- 徒歩15分ほどで、386,000㎡の敷地の自然公園（城北中央公園）があり、競技場、野球場、多目的広場などの運動施設の他、児童公園や広場などがある。



保育園内の様子



園庭



城北中央公園内の柿の木広場



2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. まちの保育園小竹向原

モデル事業の対象

- 0歳児クラスを対象として実施。

モデル事業の実施概要

- モデル事業は、以下のスケジュール・内容で実施。

実施事項	日程	内容
事前打合せ	2020年8月26日	<ul style="list-style-type: none">・ 園長、保育者数名にて初回打合せ。・ 今年度の対象年齢の決定、コロナ禍でどのように実施するかを検討した。
活動同行 (第1回)	2020年11月4日	<ul style="list-style-type: none">・ 園庭での活動に野村様とともに同行。(野村様以外はオンラインにて参加)・ 帰園後、保育者との振り返りを実施。・ 振り返り後、乳児との関わり方のポイントを野村様から説明。
活動同行 (第2回)	2020年12月18日	<ul style="list-style-type: none">・ 園周辺の公園(徒歩15分、城北中央公園つつじ広場)への散歩に、野村様とともに同行。・ 帰園後、保育者との振り返りを実施。
活動同行 (第3回)	2021年1月28日	<ul style="list-style-type: none">・ 第2回と同じ公園への散歩に、野村様とともに同行。・ 帰園後、保育者全体との振り返りを実施予定。

事前打合せ

- 乳児を対象とした初めての取組となる事から、これまでの屋外における活動の内容や、外遊びにおける子供たちの様子、保育者が心掛けていることなどについて事前に聴取した。
- 昨年幼児クラスで本事業を実施しているほか、普段から散歩やフィールドでの活動を取り入れていることもあり、大きな懸念点はないことを確認した。
- 今年度はコロナ禍での活動となるため、最小限の人数での同行、振り返り時等でのオンラインの活用等取組の方針を決定した。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. まちの保育園小竹向原

初回活動の実施

- 初回活動はコロナ禍の情勢を鑑み園庭で実施。
- 普段通りの活動を行ってもらい、公園での活動中の事業アドバイザーの関与は最小限とした。保育者の声かけの意図などを振り返り時に共有。

自発的に自然物に関わるような環境設定

- 園庭での活動では、保育者が意図的に落ち葉を1か所に集め、子供が遊びやすい環境を設定。
- 木の上の葉が揺れる様子を発見した子に静かに寄り添う保育者や子供の自発性を見守る保育者のあり方が見られた。

園庭に集めた葉っぱを空に舞いあげたり「葉っぱ～」と感触を楽しんでいる



乳児ならではの自然との関わり方

- 水がぱたぱた落ちる様子を見つめ、触れるなど、乳児だからこそみられる自然を通しての感覚遊びの様子や、抱っこを求める乳児に対して、自然に葉っぱなどに気づけるよう、その子に寄り添った保育者の対応が見られた。

園庭のわきにある水タンクで遊ぶ様子



活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。
- 自然の中での遊び方について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<保育者の関わりについて>

- 感覚刺激を意識して保育している。ある子は葉っぱが揺れていることに気づいたようで、一緒に座ってみていて心地よかった。

<子供たちの様子について>

- 葉っぱに興味を持ち、ちぎったりカサカサさせたりして遊んでいた子は、その後丸太の上に擦り付けて音を感じているようだった。
- 園庭で落ち葉が散らばっているときは興味を示さなかったが、掃き集めていたら興味を持ち、みんなで遊びが展開された。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. まちの保育園小竹向原

第2回活動の実施

- 徒歩15分程度の城北中央公園つつじ広場で活動を実施した。
- 比較的遠方の公園であったため、バギーに乗って移動した。
- 本公園への散歩は今回が初めてで、子供たちは芝生との触れ合いも初めてだった。

子供たちが広場全体に広がり、自由に興味のある遊び方を見つけている様子

- 0歳児は平らな広場で、地面に落ちている小枝や葉っぱを見つけて感触を楽しんでいた。
- 1歳後半の子たちは木登りに挑戦するなど、成長発達段階ごとに自分の楽しみ方を見つけていることができていたのが特徴的だった。

大きな葉っぱを触ったりちぎったり、日向のぬくもりを感じている0歳児



各々自分の興味のあるものを見つけて遊ぶ様子



自ら木に触れたり登ろうとしたりする1歳児



活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。
- 自然の中での遊び方について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<保育者の関わりについて>

- その場の状況を見ながら、全体を見渡す役割と子供と一緒に遊ぶ役割に自然と分擔されていた。
- 葉っぱが好きな0歳児に対しては、子供が伝えたいことを言葉で拾うことを心掛けた。

<子供たちの様子について>

- 初めての場所でどのような反応をするかなと見守っていた。ある子は太い木で地面をたたいて感触を楽しんだり、ある子は切り株に木を置いて「アリさんのご飯～」とごっこ遊びを展開していたりと、それぞれ自分で遊びを見つけて遊びこんでおり良かった。
- 今日「先生見て～」という言葉が少なくなるほど遊び込めていた。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. まちの保育園小竹向原

第3回活動の実施

- 第2回活動と同じ、徒歩15分程度の城北中央公園つつじ広場で活動を実施した。
- 比較的遠方の公園であったため、バギーに乗って移動した。

同じ場所での活動を重ねる中で興味の範囲が広がる様子

- 活動3回目では公園の鳩を見て真似る様子や、小枝を木に打ち付けた時の音を聞く遊びが展開されたりと、動物や自然物等に対する興味や遊びの広がりが見られた。

見立て遊びを通じて子供同士の遊びが広がる姿

- 活動3回目では、公園の地形を生かした釣りの見立て遊びが子供同士で長時間展開される様子が見られた。
- その中で、色・形・状況など様々な表現が言葉・行動でも見られた。



様々な素材を使って、木と木を叩きつけたときの音の違いを感じている様子



公園のくぼ地を海に見立てて、複数人で釣りの見立て遊びを展開



子供たちが釣った魚を受け取る保育者

活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。
- 計3回の活動を通じた園児と保育者それぞれの変化について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<保育者の関わりについて>

- ・ 最近音への興味が出てきている。ちょっとした音の違いも楽しむ姿がとても楽しく、じっくりと関わっていた。

<子供たちの様子について>

- ・ 「子供たち同士」で魚釣りのイメージがどんどん広がっていた。相手の気持ちや言葉を「聞く力」がついてきたと実感した。
- ・ 木の根っこを焼き場に見立てて魚を焼く姿も見られ、子供たちの想像力に感動した。
- ・ 初めて行ったときはこのような遊びは現れなかったが、何回か同じ場所で遊んだことで見立て遊びの展開が広がっていてとても面白かった。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.2. まちの保育園小竹向原

モデル事業を踏まえた整理

- 本モデル事業を通じた子供たちおよび保育者の変化について、アドバイザーを交えてディスカッションを実施。主に以下のような意見があった。

子供たちの変化について

- 同じ公園でも、活動の回数を重ねることで遊び方に広がりが見られた。言葉の発達も進む中で、相手とのやりとりなど、見立て遊びも発展していると感じた。
- いろいろな自然物を見つける力が身につき、子供たちも広場に行くことが楽しみになってきている。
- 初回は保育士が関与することも多かったが、活動の回数を重ねる中で、子供たちだけの遊びが増えた。
- 落ち葉の多い秋の活動から季節の変化を通じて、物的・人的環境、いろいろな大人との関わりなどから、自分の興味を探索する姿がみられてよかった。子供それぞれの育ちがたくさん見られ、成長したと感じる。

保育者の変化について

- 事業中でのアドバイザーからの意見を通じて、日々の活動を先生が自信をもって取り組めるようになった。また、各回の振り返りの場も有効だった。
- 乳児ならではのリスク対応の重要性や視点についても再確認できた。

- 本モデル事業の最後に保護者に対してもアンケートを実施。次のような意見があった。
 - ✓ 公園に出かけると、積極的に生き物、植物を追いかけたり、観察、触るようになった。
 - ✓ 寝つきが良くなったり、ご飯をよく食べるようになり、おかわりまでするようになった。
 - ✓ 広場での遊びは、自然や季節を味わったり、いろいろな見立て遊びをする力をつけたり、身体能力の発達にも役立つと感じる。
 - ✓ 生き物に興味が出てきたので、図鑑を購入した。
 - ✓ 今までは遊具のある公園に行きがちだったが、遊具のない自然の中で遊ぶことが増え、子供たちの想像力、創造力に気づかされた。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. 本村保育園

基本情報

所在地	港区南麻布
運営主体・種類	港区、認可保育所
施設の規模 (年齢別人数)	0歳:15、1歳:19、2歳:20、3歳:20、4歳:20、5歳以上:20 計114人
周囲の自然環境	<ul style="list-style-type: none">・ 広尾駅の東側、閑静な住宅街に囲まれた地域。・ 各国の大使館も多く、外国人の往来も多い。・ 近くには、自然豊かな有栖川宮記念公園があり、都心部の園の中では自然環境に恵まれている。
事業開始前の自然を活用した保育の取組状況	<ul style="list-style-type: none">・ 従前は定期的に公園に散歩に出かけていたが、新型コロナウイルス感染拡大により10月末頃までは戸外活動を行えていない。・ 園内で自然と関われる機会をつくるため、園庭に畑を作るなどの取組を行っている。

園の周辺環境

- 広い園庭、保育室から直接園庭に出られる縁側がある。
- 園庭には花壇があり、花や野菜などを栽培している。
- 園から数分の場所に有栖川宮記念公園が立地。公園内には多数の木が植えられており、歩道や広場の他、池や小川など変化に富んだ環境となっている。

園庭の様子



園の外観



2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. 本村保育園

モデル事業の対象

- 3歳児クラスおよび4、5歳児クラス（合同）を対象として実施。

モデル事業の実施概要

- モデル事業は、以下のスケジュール・内容で実施。

実施事項	日程	内容
事前打合せ・ 導入簡易研修	2020年8月26日	<ul style="list-style-type: none">・ 園長、担任保育士等と対象、内容について事前打合せ。・ 自然活用に係る簡単な研修も実施。・ 現状の不安や取組における課題等についてすり合わせを実施。
活動同行 (第1回)	【3歳児】 2020年11月18日 【4歳児・5歳児】 2020年11月16日	<ul style="list-style-type: none">・ 園周辺の公園（有栖川記念公園：徒歩5分程度）での活動に同行。・ それぞれの活動終了後、保育者との振り返りを実施。
活動同行 (第2回)	【3歳児】 2020年12月14日 【4歳児・5歳児】 2020年12月17日	<ul style="list-style-type: none">・ 園周辺の公園（有栖川記念公園：徒歩5分程度）での活動に同行。・ それぞれの活動終了後、保育者との振り返りを実施。
活動同行 (第3回)	【3歳児】 2021年1月19日 【4歳児・5歳児】 2021年1月21日	<ul style="list-style-type: none">・ 園周辺の公園（有栖川記念公園：徒歩5分程度）での活動に同行。・ それぞれの活動終了後、保育者との振り返りを実施。

事前打合せ

- 初めて事業に参加する園であり、コロナ禍の自粛明けの活動となったため、事前の打ち合わせを2回実施。これまでの自然を活用した活動の実施状況や、懸念点を聴取した。

事前打合せでの主な意見

<自然を活用した活動に関する考え>

- ・ なるべく自然と触れ合う保育ができるようにしたい。有栖川記念公園を活用するほか、園庭内でも花壇などを使って自然物に触れられる環境にしている。
- ・ 木登りや枝を活用した遊びなど、これまで少し捉え方に悩む面もあった活動のあり方も探っていきたい。

<モデル事業参加に際しての不安や懸念>

- ・ 自粛の影響により、散歩に行くことができていない。体力が低下している点を懸念している。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. 本村保育園（3歳児）

初回活動の実施

- 園から最も近く、自然も豊かな有栖川宮記念公園で実施。9:45に園を出発し、10分程度歩いて活動拠点に到着。
- 11月に今年度初めての戸外活動を実施し、今回は4回目。
- 先生方には普段通りの活動を行ってもらい、公園での活動中の事業アドバイザーの関与は最小限とした。保育者の声かけの意図や当日の気づきを振り返り時に共有してもらった。

子供たちが自由に遊びを見つけて遊ぶ様子

- 傾斜のある場所や水辺など、多様性のあるルートで、好きなものを見つけながら様々な自然物との関わりが持っていた。
- 保育者は明確な指示を出すのではなく、子供たちの興味を促すような声掛けの中で、子供自ら新たな遊びを発見できるよう工夫していた。



周回ルートで、木の実を発見する子や、先へ進む子供たち



急斜面の崖のぼりに繰り返し挑戦

活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。自然の中での遊び方について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<保育者の関りについて>

- 歩みが早い子たちと遅い子たちがいる中でもうまくチームとして活動できるよう、先導する先生と後ろでフォローする先生を事前に決めて声掛けや目線で連携しながら散歩できた。

<子供たちの様子について>

- 戸外活動を始めた当初は、普段歩かない子についてはついていだけで体力的に必死だったが、今日は滑りやすい斜面も踏ん張って登れるようになってきていた。子供は少し環境を環境を変えるだけでどんどん成長するのだと改めて感じた。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. 本村保育園（3歳児）

第2回活動の実施

- 前回同様、有栖川宮記念公園で実施。
- 公園内で拠点を移動しながら活動を実施。
主な拠点としては、大きな丸太がある場所、深い茂み、木登りが行える場所を活用した。

自然を活用した遊びに少しずつ慣れてきた子供たち

- 戸外活動を継続する中で、棒を使った遊びや木登り、崖のぼりなど挑戦的な遊びにも少しずつ慣れ、「もっとやりたい」という気持ちが強くなってきた。
- また遊具がない中でも、自然物を使って自ら遊びを生み出せるようになってきた。
- 一方で、まだ子供たちの経験値が少ない中、「挑戦したい」気持ちが高まってきたことで一部危険な場面も発生。



大きな丸太に登ったりして遊ぶ様子



落ち葉でお風呂を作り始める様子



最近始めた木登りが流行っており、複数の木で木登りが展開される様子

活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。
自然の中での遊び方について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<保育者の関りについて>

- 今回は起伏がある道や木登りなどで体幹を鍛えようと考えてコース設定した。
- 木登りでは、自分の力でまだ登れない子に対しては保育者が乗せてあげるのではなく、「他のお友達がどうやるか見てみよう」と伝えて登る方法を考えるよう促した。

<子供たちの様子について>

- 出発前から子供たちが少しバタバタしていた。また当日は乾燥した落ち葉がいつもよりも多く、転ぶ頻度が普段より多かったり、全体的に危険を感じる頻度が多かった。
- 今回のように活動的な取組は、疲れが少ない火曜日以降にした方がよいと感じた。
- 木登りの最中で、一部危ない状況が見られた。最近自信がついてきて木登りが楽しくなってきたタイミングだったので、この時期が一番危険だと再認識した。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. 本村保育園（3歳児）

第3回活動の実施

- 前回同様、有栖川宮記念公園で実施。
- 前回の反省を踏まえ、序盤は手ぶらで遊べる活動、後半に木を使った遊びができる活動を取り入れるようルートを設定した。

各活動場所で遊び方に広がりが見られる様子

- 活動当初に草むらの斜面に来たときは、昇り降りを楽しむ様子が大半だったが、今回はドングリ拾いをする子や葉っぱの感触を楽しむ子など、複数の遊びが展開される姿が見られた。
- また強い風を感じて楽しんだり、風を利用した遊びが繰り広げられたり、「登れる木」を自分たちで見つけて挑戦するなど、これまでの活動で得られた経験を活かした遊びも展開された。



草むらで強風を全身で体感している子供たち



以前訪れたことのある場所でドングリ拾いに没頭



空に落ち葉を投げて、風に舞った葉っぱに走りこむ遊びを生み出した様子

活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。自然の中での遊び方について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<保育者の関りについて>

- 今日とは広場で体幹が育つ遊びをし、その後探索ごっこで木の枝を持って遊べるルートに設計した。
- 落ち葉がたくさんある広場は、素通りする予定だったが子供が興味を持ったので臨機応変に予定を変更した。

<子供たちの様子について>

- 強い風が吹いたときに頭上で揺れる枝を見て「揺れてる～！」「台風の風だ！」「びゅーびゅー言ってる！」と五感を使って楽しんでいる様子が見られた。自然の変化に気づき、風が吹いただけでも楽しめる子になっていると感じた。
- 歩みが遅い子供たちは、これまでは声掛けをしても自ら「行ってみよう」と行動することは少なかったが、今日は楽しそうな笑い声の下から聞こえたときに少し声掛けしただけで主体的に行動していた。少しずつ自分から行ってみようとする行動が増えてきた。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. 本村保育園（4、5歳児）

初回活動の実施

- 園から最も近く、自然も豊かな有栖川宮記念公園で実施。9:30に園を出発し、公園まで5分歩き、その後クラス別に活動開始。
- 春の緊急事態宣言、酷暑もあり、今年度の訪問は2回目。
- 先生方には普段通りの活動を行ってもらい、公園での活動中の事業アドバイザーの関与は最小限とした。

制作に活用する自然物を探して散策

- 4歳児クラスは恐竜制作に使用する木の枝、5歳児はリースづくりに使用する枝や木の実などを収集しながら公園内を散策。
- 4歳児クラスでは保育者が行きたいルートを園児に訪ねながらルート選択。行きたいルートが分かれる際には適宜2隊に分かれ、それぞれ見つけたものを報告し合う姿が見られた。

制作に使う自然物を収集



収集した自然物を使った見立て遊び



収集後は広場での自由遊び

- 5歳児クラスは自然物収集のあと、広場に移動。鬼ごっこ、拾った自然物を使った料理の見立て遊びなど、それぞれの遊びを展開していた。

活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。自然の中での遊び方について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<保育者の関りについて>

- ・（4歳児）子供たちに自由にコース選択を委ねるように心がけており、子供たちは進みたい方向を子供同士で話し合い、散策することができていた。
- ・（5歳児）散策の途中、滝の近くに行ったときは危険は認識つつも、なるべく見守るようにした。

<子供たちの様子について>

- ・ 木の実などの収集物の使い方について子供たちが自発的に話し合う姿が見られた。
- ・ 普段園庭では乳児もいてなかなか走り回ることができないが、今日は広い場所で思い切り走りまわるなど、思い思いの活動を楽しんでいた。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. 本村保育園（4、5歳児）

第2回活動の実施

- 前回同様、有栖川宮記念公園で実施。9:30に園を出発、公園まで5分歩き、その後クラス別に活動開始。
- 前回以降、同じフィールドでの活動は2回目。

子供たちが主体となった探検ごっこ（4歳児）

- 4歳児クラスは子供たちが先頭になり公園内を探索。子供たち自身で、はぐれている子はいないか、次はどちらに進むかを話し合っているか、を確認しながら進んでいた。
- 前回の振り返りでのアドバイザーの助言を受け、帰園前に公園で振り返りを実施。楽しかったことや見つけたものを発表する姿、また真剣にお互いの報告を聞く姿が見られた。

帰園前の振り返り
(4歳児)



バーベキューごっこの材料を探しつつの探索（5歳児）

- 前回収集した自然物を食べ物や食器に見立てたバーベキューごっこをして帰園したことから、その続きをするという目的をもって出発。
- バーベキュー遊びをする会場（広場）に到着するまでの道は、斜面に登る、丸太渡を楽しむ。

丸太渡り、斜面下りなどを楽しむ様子
(5歳児)



活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。自然の中での遊び方について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<保育者の関りについて>

- （4歳児）危険だからとなんでも遠ざけるのではなく、（注意深く見守りながらではあるが）「やっても良いこと」の範囲を広げつつある。
- （5歳児）これまでにやってこなかったこと、自然の中でしかできないことを行うように心がけるようにし、自然の中での遊びを園児が楽しむようになっている。

<子供たちの様子について>

- 普段一緒に遊ばない園児同士が、フィールドでは一緒に遊んだり、見つけたものを共有するなど、普段とは異なる姿も見られた。
- 山茶花を見つけ、帰園後に自発的に桜餅を作るなど、自然物を使って自発的に遊びを見つける姿が見られるようになった。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. 本村保育園（4、5歳児）

第3回活動の実施

- 前回同様、有栖川宮記念公園で実施。9:30に園を出発、公園まで5分歩き、その後クラス別に活動開始。前回以降、同じフィールドに週1～2回訪問している。

探索中に見つけた場所での遊び（4歳児）

- 前回、川に貝殻が落ちていたためまた拾いたい、と川周辺で遊ぶ意思を持って出発。1時間弱、川やその脇の斜面で松ぼっくりや木の実の収集、葉を流す、など自然を使った活動を等を楽しんだ。

川で葉や木の实を流して観察



体を使ったダイナミックな遊び展開（5歳児）

- 斜面を上り下りしたり、斜面を登ったのち滑り台のように下りたり、子供たち同士で遊び方を工夫したり相談したりする様子が見られた。
- 当初は前回同様バーバークューごっこをする、という予定で出発したが、木や茂みを利用したかくれんぼや自由遊びに夢中になり、柔軟に予定を変更して活動を継続した。

周辺の起伏への上り下りを楽しむ



活動の振り返りの実施

- 活動後、保育者とアドバイザーにて振り返りを実施。自然の中での遊び方について、以下のような意見があった。

振り返りでの主な意見

<子供たちの変化について>

- 自然フィールドでは、広場でなくても道の脇でも名もない遊びをする姿が見られた。同じ場所においても、収集する子、体を動かす子、観察する子など、様々な姿が見られるようになってきている。
- 斜面のぼりなど、できる動作が増えてきた。また、自発的に自然物を使った遊びを見つけているようになってきている。

<保育者自身の変化について>

- 子供は広場や遊具のある所で遊ばせるという概念にとらわれていたが、公園内の名もない場所でも子供たちは遊びを見つけて熱中するということがわかった。また、少し引いて接することで、子供たち同士のコミュニケーションも増えた。
- 当初は枝の扱いなど細々と保育者に聞いていたが、最近は自分たちで話し合っルールを設定することも多く、重大な危険につながることなどの最低限の介入で問題なくなってきた。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. 本村保育園（3～5歳児）

モデル事業を踏まえた整理（1/2）

- 本モデル事業を通じた子供たちおよび保育者の変化について、アドバイザーを交えてディスカッションを実施。主に以下のような意見があった。

子供たちの変化について

- 当初「戸外活動」というと固定遊具を想像していたが、人工物が何もない広場での活動を積極的に取り入れる中で、何もないところでもしっかり遊び込める力がついた。大人の公園に対する視点次第で、子供たちの遊びの広がりが変わると実感した。
- 秋から戸外活動を始めただけでも、自分から自然物に触れようとする機会が増え、成長を感じた。
- 自然物の収集や持ち帰り、使った遊び（枝も含め）をするようになってから、使い方やルールも子供たちが自分で考えるようになってきている。また、園内と園外の活動の繋がりがでてきた。
- 今までは鬼ごっこがメインで遊んでいたが、自然に興味を持つようになり、ここまでできるんだという新しい一面を発見した。

保育者の変化について

- 活動当初は、よじ登りの運動をさせるためジャングルジム等固定遊具への活動も多かったが、今回の活動を通して自然物でも十分体幹を使った遊びができると再認識した。
- 子供自らの力で遊びの世界観を広げられるよう、「今何に関心を持ち、それに対して自分が何をサポートできるだろうか？」と一層考えて保育を行うようになった。
- ケガの懸念や近隣住民との兼ね合いから、「危ないこと」「やってはいけないこと」を広めに捉えて子供たちに繰り返し伝え、活動に介入していたが、子供たちの様子を見つつ少しずつ許容範囲を広げた。結果的に子供たちは身体活動的にも、遊びの内容的にも、できることが増えた。
- 通り道でも楽しめる、広場だけが遊び場ではない、園外ならではの遊びを考えるなど、活動に対する保育者の見方が変わった。
- 子供主体で活動することで、自由な遊びを展開する子供の姿を捉えることができ、成長への視点が広がった。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.3. 本村保育園（3～5歳児）

モデル事業を踏まえた整理(2/2)

- 本モデル事業の最後に保護者に対してもアンケートを実施。次のような意見があった。
 - ✓ 天気の良い日や温かい日は公園に行きたがるようになった。
 - ✓ 公園へ行った日は、お迎えの帰り道、必ず今日の出来事を話してくれるようになった。体の動きもダイナミックになった。
 - ✓ 外出時の話をし、友人とのかかわりが深まったと感じた。
 - ✓ 以前は公園に行くと遊具で遊んでいたが、探検しよう！と遊具が無くてもずっと遊んでいられるようになった。
 - ✓ 公園で見つけたもの、歩いた道などをよく教えてくれるようになった。自然物を用いた製作活動が増え、家でも何かをつくることが増えた。
 - ✓ 先日、公園で道のない、草の中をかきわけて、岩のようなところへのぼっており驚いた。たくましくなった。
 - ✓ どんぐりを使っておままごとのように自然のものを遊びに取り入れるようになった。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.4. 令和元年度事業の効果検証

実施概要

- 昨年度モデル事業から継続して参加しているせせらぎ保育園及びまちの保育園小竹向原について、昨年度活動に参加していた保育者を対象に意見交換会を実施した。

意見交換会の概要

狙い

- 継続的に自然を活用した活動を行うことで、保育者の意識変化や子供の短期的な行動の変化に加え、非認知能力の醸成につながっていると考えられる効果がみられるか、そのほか継続することによる効果を感じているかについて確認を行う

意見交換対象者

- 昨年度・本年度と継続してモデル事業に協力いただいているせせらぎ保育園、まちの保育園小竹向原を対象に実施
- 昨年度モデル活動の対象であった幼児クラスを、当時担当していた保育者と意見交換を実施

意見交換内容

- 昨年度の活動を踏まえた現状の活動状況
- 活動を通じて見られる子供たちの成長や特徴的な様子（活動を継続することで得られたと考える効果等）
- 活動を継続する上での課題認識や工夫等

2. 参加園でのモデル事業実施

2.4. 令和元年度事業の効果検証

実施結果 せせらぎ保育園

- 以下のような意見が挙げられた。

本年度の活動状況

- 本年度はコロナの影響もあり、春先から十分や園外での活動は実施できていなかったが、11月頃から昨年度も活動場所としていた近隣の雑木林等での遊び等を実施。季節柄、どんぐり拾いなどを実施。
- 散歩の頻度などは減ったが、散歩の途中で拾ったものを活かして制作を行うなど工夫をしている。ヒントを与えつつも各々で自由に作るようにしている。

子供たちの様子

<戸外活動時>

- 久しぶりの外での活動でも、4,5歳児は昨年度の遠隔地での活動内容、雑木林での活動を覚えており、**家づくりや落ち葉遊びなどの活動を自発的に発案し、行うようになっている**。散歩の途中でも様々なものを拾ったりする中で、**枯葉の色の違いに自ら気づき、色の違いについて話す様子が見られるなど、自由にいろいろなことに興味を持って取り組んでいる**。
- 昨年度の遠隔地での活動や雑木林での活動を経験して知っている子たちが、**以前のイメージを思い出し、年下の子たちに伝えて遊んでいる様子が見られる**。昨年度の活動を経験していない3歳児も、**年上の子たちの様子を見て真似てみたり、自分たちなりに自然での活動を楽しむことができおり、波及効果もあるように思う**。
- 別のフィールドでも、自然物などの感触（例えば落ち葉は乗るとモフとする、雪のようにして遊べる）を感じたり、自由な遊び方を覚えており、自分たちで遊びを展開できるようになった。

<その他の活動への波及効果>

- フィールドで収集した木の実、枝、葉などを使い、ドールハウスやケーキを作るなど、**自然物を使った制作に熱中する様子が見られるようになった**。年長児を中心に、作りこむ、遊びこむ様子が見られるようになった。
- 戸外活動が好きではない園児で、**昨年の活動をきっかけに外遊びが大好きになった子がいた**。もともと周囲をリードするタイプの子ではなかったが、外遊びに関連する活動では、「こんなものも作れるよ」「こんなことができるよ」など、積極的に活動するような反応が見られるようになった。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.4. 令和元年度事業の効果検証

実施結果 せせらぎ保育園

- 以下のような意見が挙げられた。（前頁続き）

感じている難しさや工夫が必要な点

<異年齢児、他園との関係>

- ・ 自然物を活用した遊び（例えば枝を使った遊び）は、広いフィールドでは問題ないが、乳児もいる園庭では危険なこともあるなど、場面に応じて対応が必要だと感じる。（昨年事業以降、枝遊びを解禁したため、現在、課題として顕在化している面もある）
- ・ 活動に適したフィールドは近隣の他園（低年齢児含む）が活動に来ていることも多々あり、安全管理上気を使うことがある。乳児と幼児が混ざってしまうと保育者として安全面に不安を覚えることがある。また、密にならないかという現状ならではの不安もある。
- ・ もっと公園など活動できる場所があるとよいと感じる。このような状況でも子供が自由に遊べる場所の確保は課題と感じている。
- ・ 他の園とのコミュニケーション、情報交換なども今後の課題かもしれない。

<保護者とのコミュニケーション>

- ・ 保護者に対し、今子供たちが何に熱中しているか、どのような遊びが展開されているのかを伝えることが難しい。関心のない保護者もあり、場合によっては、（戸外活動による）ケガや衣服の汚れを指摘されるケースもある。

<理想とする活動とリソースのギャップ>

- ・ 人員体制やスケジュールにより、園児のやりたいことをかなえてあげられない点（人員不足により、遠方の、園児が行きたいと思っている場所まで行けない、など）が残念だと思う。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.4. 令和元年度事業の効果検証

実施結果 まちの保育園小竹向原

- 以下のような意見が挙げられた。

本年度の活動状況

- コロナの影響で戸外での活動機会は少なくなっていたが、幼児の散歩は、手洗いの徹底を行う等の衛生面の対応を行った上で、徐々に増やしている。以前の活動場所の一つであったプレイパークは、外部の方が多く接触機会も多いため行けていない。
- 春からの自粛明けは園庭に出る人数も制限するなどの対応を行っていた。
- 水遊びについても区のガイドラインで制限があったため、ジップロックに氷を入れて感触を楽しむなどの工夫を行っていた。
- 秋からの落ち葉での遊びも0歳児などは園外にできることが難しかったため、外から落ち葉を持ち込んで遊びに使うなど工夫していた。

子供たちの様子

<活動経験が増えたことによる表現力の高まり>

- 昨年度からの活動を通して様々な素材と出会ってきた経験が、**個人の表現の中で現れるようになってきており、いろいろアウトプットしている様子**が見られる。先日園庭で女の子が砂に魚の絵を書いていた。そのあと、今度は紙の上にボンドで魚の絵を書き始め、その上に砂場の砂をかけて、ボンドを使った砂絵を自発的に書いていた。ボンドと砂場それぞれの素材をこれまで使ってきた経験によって、一人ひとりの中で自発的に工夫した遊びがうまれている。
- 木の実が増える季節になると、自発的に子供たちがどんぐりを持って帰ってきてクリスマスツリーを作るなど、**保育者が何も言わなくても季節性を感じた表現**が見られている。

<各自の自発性の発揮、コミュニケーションによるリスク回避>

- 4歳児、5歳児は自分で目的をもってそれに向かって活動するようになってきていると感じる。
- 3歳児でも話せばわかる子たちなので、遊び方などは話し合っ決めて決めるようにしている。危険なこともしっかり理由を伝えて説明することでちゃんと理解して活動してくれる。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.4. 令和元年度事業の効果検証

実施結果 まちの保育園小竹向原

- 以下のような意見が挙げられた。（前頁続き）

感じている難しさや工夫が必要な点

<保育者一人ひとりの許容範囲の違い>

- 子供の怪我や園庭の物の扱い等に対して、先生同士で意見が異なる。良くも悪くも園庭の使い方にルールを設けていないため、今後も園内で対話しながら使い方を考えていく。
- 園内に整備するもの、それに伴う危険、リスクが生じた際の園の対応等は継続的に話し合っている。自然物の素材の使い方や園庭の使い方は保育者の対話を通じてルールを決めるようにしている。

<他園でも同じような活動をするために保育者の意識が重要>

- 他園では、原っぱへ行くときはシャボン玉やボールなど人工物を持っていくことが普通になっており、子供も保育士も物がないと遊べない様子。特に0~2歳児は外に出ただけで感じられる五感の感覚を養う認識が必要。
- 子供の注目を集めようとする、保育者主体の保育が散見される。子供をじっと待つ、観察することの大切さを伝える必要がある。
- 園の方針等について、保育者同士が話し合う時間を確保することも重要。

昨年度モデル活動を踏まえた保育者としての気づき

<自然に対するさらなる意識の深まり>

- 自然物を製作で使うだけでなく、その自然物が最終的には自然に戻っていくということも伝えるようになった。
- 自然と関わるとおのずと美しい言葉がでてくる、という話を昨年聞いて、言葉遣いも意識するようになった。
- 絵具遊びや粘土遊びなど、本来園内でできる遊びも戸外で自然の光を浴びながら取り組むことが増えた。

<振り返りや客観的な視点の重要性>

- ビデオで客観的に自分たちの活動を振り返ることで、改めてこれまでの取組が「これでよかったんだ」と再認識でき、今年度は自信をもって保育に取り組んでいる。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.4. 令和元年度事業の効果検証

意見交換会を通して見えた活動の有効性

- 以下のような結果・効果が得られたと考えている。

活動を継続することの意義は大きい

- 自然を活用した保育の実践は、短期的に保育者の意識の変容や子供の行動の変化がみられることに加えて、継続的に活動を行うことで、より一層主体性や創造性が発揮されることに資する可能性があることがわかった。
- 昨年度の事業がきっかけで戸外活動が好きになった子供や、積極的に活動するようになった子供も一部確認できた。

活動初期段階では、遠隔地活動を活用することも効果的なことがある

- 普段の活動場所よりも自然が豊かな場所での体験が、日常の活動場所での遊びの広がり等に資する面があると考えられる。
- 遠隔地での活動を通して活動の幅が広がったことに加え、当時の経験を年下の子たちに伝えて遊ぶ様子も見られ、園全体での波及効果が見られた。

活動経験の増加によって表現力や自発性が高まる可能性

- 活動経験が増えることによって、様々な自然物に触れる経験が得られ、その結果複数の素材を使ってそれぞれの特性を活かした活動が行われるなど、表現力の高まりも見られた。
- また、活動の中で自由な遊び方を経験することで、自然物を使って主体的に作りこむ・遊びこむような様子も見られた。
- 様々な経験を重ねることで、素材の特性に対する理解や自分なりのアイデアの引き出しが広がる可能性があるのではないかと。

自然物に対するさらなる意識の深まり

- 継続的な活動を通して、自然物の生態サイクルや日々の言葉遣いに対しても意識が向くようになっていたり、室内遊びへの応用力の高まりがみられた。

意見交換会を通して見えた、取り組む上での留意点

- 以下のような留意点が見られたと考えている。

- 地域との連携、地域資源のさらなる活用
 - 他の園や近隣の方、地域との連携が、活動フィールドの確保、安全管理等の面で重要。地域にある物的、人的な資源を巻き込んで活動を展開するという視野も重要。
- 保護者の理解促進・積極的なコミュニケーション
 - 効果的な取組の促進、リスク管理の観点からも保護者に活動の意義、特性等を理解してもらうことが重要である。そのためには、継続的なコミュニケーションも必要となる。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.5. モデル事業を通じての考察

モデル事業から得られた示唆

子供の変化

- ・ 人工物がない環境での活動を続けることで、自ら「遊びを生み出す」力を育むことができることが分かった
- ・ また、季節の変化を五感で感じ取り、自然の心地よさを感じたり言葉で表現できるようになったり（表現・視野の拡大）、傾斜など自然界の様々なフィールドでの経験により、体の使い方が身についた（体力面への貢献）事例があった
- ・ 一部危険と考えると遠ざけがちな活動も取り入れることで、自分が「できる」範囲に対する理解が広がった

保育者の変化

- ・ 外遊びの際に、典型的な公園遊びに終始しがちだったが、自然フィールドで子供たちが自ら遊びを創り出すことを促し、活動の幅を広げていた
- ・ 本事業実施当初から、自然を活用した活動についての知識が豊富で適切な遊びの設定をしている保育者が存在。彼らは「保育園がどうあるべきか」を自ら考え、主体的にプレイパークに行くなど学びの姿勢が見られた
- ・ 今後都内へ活動を展開する上では、保育者に対しても自然活用の魅力を伝え、自主的な学びを促す取組が必要

安全面への配慮

- ・ 自然遊びに少し慣れ始めた時期は、新しいことへの挑戦意欲が強い一方でまだ自分の能力を認識しきれておらず、怪我に繋がりがやすい（今回1園で木の棒による怪我が発生）
- ・ 活動に危険が伴う点は認識した上で、当日の天気・気温・曜日等外的要因と、子供の様子を観察し、その日に適した活動内容を設定する必要がある（月曜日は疲れが残りがちなので落ち着いた活動、寒い日は風がしのげる場所等）。また保育者同士で危険に関する認識を共有することも重要

乳児への導入効果

- ・ 乳児においても、自然を活用した活動は十分可能。運動機能・感覚機能を高めることができる
- ・ 自然物と触れ合ったり適切な距離での保育を意識することで、自ら遊びを見つけ遊び込めるよう促すことが十分可能
- ・ 取組を促すうえでは、子供のペースを尊重しつつ、段階的に自然物と触れ合う機会を作ることが重要
- ・ 子供の成長に合わせて、目的を持った活動場所選び及び安全管理が重要

都心での導入効果

- ・ マンションに住む家庭やバリアフリー設備の充実等により、普段歩行距離が少なくつま先を上手に使えなかったり転びやすい等運動能力が低い子供が一定数存在
- ・ 自然環境下の、不規則な起伏がある場面での活動を取り入れることで、普段使やわらない体幹を鍛えることが可能

2. 参加園でのモデル事業実施

2.5. モデル事業を通じての考察

(参考) コロナ禍での各園の工夫

- 本年度はコロナ禍での事業実施で戸外活動の回数や取組に制限が発生したが、各園で以下のような工夫をしながら自然を活用した保育を実践していた。

室内での
自然物との
触れ合い

対乳児

- 土、水、土粘土をポリ袋に入れての感触遊び
(コロナ禍で複数での水の接触が制限されていた際の取組)
- 室内の窓を開けて風や太陽の光を浴びる時間を意識的に導入
- 室内で過ごし続けるストレスがみられたら、ベランダに出て外の風を感じる、リラックスする時間を設ける

対幼児

- 戸外活動で拾ったどんぐりを園内の遊び(ごっこ遊び、表皮剥き)に活用
- 園庭で落ち葉プールを新設
- 公園での外出ができなかった期間中は、自然に関する図鑑を見るなど、次の散歩の活動につながる活動もする
- 園庭で植物、野菜などを育て、それを活用した体験活動、工作などをする

戸外活動
での工夫

対幼児

- 他園や近隣住民との接触が比較的少ないフィールド選び
(広場や固定遊具がある場所ではなく、草むらや川付近を活用)

2. 参加園でのモデル事業実施

2.5. モデル事業を通じての考察

今後に向けた定量的な効果検証のありかた

- 今後事業をより広く展開する上では、定量的に取組の効果検証を行うことも重要。
- 定量的な効果検証の方法としては、以下の内容が考えられる。今後の活動の中で、具体的な検証を実践することも有用ではないか。
- また具体的に検証を行う上では、既存調査を踏まえた設計・検証が必要である。

	視点	考えられる計測内容
子供	身体機能の向上	<ul style="list-style-type: none">・ 運動能力、握力、足指筋力
	安定した生活リズムの定着	<ul style="list-style-type: none">・ 活動後の食事量・ 活動後のお昼寝の時間
	主体性・表現力の向上	<ul style="list-style-type: none">・ 活動中の子供と保育者との距離・ 活動中に発生した遊びの数・ 活動中に表出したオノマトペの数・ 見立て遊びの平均実施時間
	多様な人・物との関わり向上	<ul style="list-style-type: none">・ 1人あたりの他の子供とのコミュニケーションの回数・ 活動中に使用した自然物の種類数
保育者	保育の質の改善 (主体性を促す保育へ)	<ul style="list-style-type: none">・ 活動中の保育者からの声掛けの回数・ 活動中の保育者の笑った回数

2. 参加園でのモデル事業実施

2.5. モデル事業を通じての考察

事業アドバイザーからのコメント



(一社) new education LittleTree
野村直子氏

取組の特徴と意図

- ・ 周辺環境と保育者の個性を活かした各園独自の取組を。

様々な環境の違いはあるが、自然はどこにでもある。それに気づきどう保育に活かしていくかということが今回の取組ポイントです。方法は多種多様に存在しますが、それを真似て行うよりも、各園で大切にしている子供との関わりや考え方があるため、それに沿いながら無理なく進めることを意図しました。活動方法を伝えるよりも、保育者自身の気づきや保育に対する思いやスタンスを引き出し、表現してもらうように振り返りを行いました。そのことにより自分自身の保育観・子供観を見直す機会となり、他の保育者の振り返りを聞くことで、保育の視点・視野も広がります。自然というものを通すことで、子供の新しい一面に気づきやすくなり、保育者自身の感性や感覚も冴えて、決まりきった保育ではなくなります。自然も子供も変化する難しさはありますが、その変化も楽しんで欲しいと思いながら一緒に取り組みました。

実施中にみられた変化・効果

- ・ 体験と振り返りで効果は歴然。

体験した後は振り返りが大切。これは体験学習の基本的な考え方です。今回の事業の取組は、保育者自身の体験学習のサイクルが機能したように感じています。毎回活動後に保育者との振り返りの時間を持つことで、子供たちの姿の変化やそれを捉える保育者自身の気づきと変化が生まれました。振り返りは反省ではなく「あの時Aくんがこんなことしていて…」という自分の心が動かされたようなエピソードと共に活動を振り返ることで『あの場所だったからこの姿が生まれた』『自然とこんな風に関わる子供たちなんだ』と子供たちを捉え、成長を感じている保育者の言葉が多く聞かれました。

それは、保育者自身の意識の変化や新たな気づきへと繋がりました。子供たちの姿として共有されたのは、コミュニケーションが豊かになり、言葉の表現力や発想の自由さ、イメージを伝えようとする他者との関わりや自然物を組み合わせ工夫し遊びに没頭する姿。その中で子供同士でルールを作ったり一緒に相談しながら遊びを作り出す協同性のような姿も見られました。そして昨年からの継続で、遊びが文化になっているようなエピソードもありました。保育者自身が子供を通して保育を振り返ることで、子供の力を再認識し、保育の中で感じた心地良さや面白さが共有されました。

考察・さらなる活動に向けて

- ・ 取組を継続して進めていくことへの課題。

上記に書いた通り、一定の効果が見られた本活動を継続していくことへの課題を感じています。園全体で自然を保育に取り入れていくことを推進していくには、プロジェクトチーム等を作り、推し進めていく必要があると思います。今はまだ、保育者一人一人の取組になっているところが多いため、保育者間で進めるための工夫が必要な段階です。

2. 参加園でのモデル事業実施

2.5. モデル事業を通じての考察

new education LittleTree

野村直子氏

事業アドバイザーからのコメント

実施に際しての考え方・配慮点

事業を通じてわかったことは、自然を取り入れることに対する漠然とした不安感がハードルとなっていることです。危ないのではないか？難しいのではないか？何をしたら良いのか？こうした疑問から不明確な活動として現れていたようです。そして保育者自身の心の余裕と興味や視点によっても、活動の幅や保育内容自体にも大きく違いが生まれることもわかってきました。元々自然に興味がある人はどんどん進めようとし、子供が楽しんでる様子もキャッチしやすいようです。一方で、自身に体験が少ない人にとっては、何をしたら良いのかわからないようです。自然を保育に取り入れることに特定の方法がある訳ではありません。周囲の環境を活かし、そこで子供たちが自然と出会い過ごすことで生まれる遊びや成長は、その時々自然と子供によっても変わります。自然と子供の変化をどのように捉えるか？そこが保育者の力量になってきます。“保育者の力量”それは、如何に一緒に自然に気づき、愉しめるかだと思います。その中で子供の気づきや成長に感動し、自然の中で変化に富んだ豊かな体験が可能になるのではないのでしょうか。特に都心部の子供たちは脚力が弱いと強く感じました。つま先で蹴る力が弱い子、ちょっとした凸凹で転び、身のこなしがあまり上手でない様子が見て取れました。自然環境の不規則な地形を歩く体験が必要だと感じています。体験の乏しさは怪我にも繋がります。怪我を懸念して平坦な場所を選ぶのではなく自分の体を使いこなす体験を意図的に取り入れることが必要と考えています。

これから自然を保育に取り入れていこうとする時、一番ハードルの低い方法は、子供と一緒に自然に気づく体験をするということです。散歩に出かけ、どんな自然に気づいているか子供の声に耳を澄まし、保育者自身も五感で自然を感じてみる…それだけで、いつもの散歩とは違って行くのではないのでしょうか。次に出てくるのは、どこまで子供の危険に見える遊びを許容するかということです。このさじ加減は保育者自身と子供の様子との相談になります。「危ないから禁止」とするよりも「どうしたら安全に行えるか」と危険を認識して安全を知る活動に繋げることが大切です。そして慣れてきた時が一番危険です。保育者も緊張感を持ち続けることは大切です。

さらなる活動の促進・展開のために

この活動は完成形はないのではないかと思います。そのため、保育者同士で情報を共有し合いながら、アイデアを出し合いながら進めていくことでより善い保育を目指すことに繋がると思っています。そのため、保育者間の振り返りが大切になってきます。これは安全管理の視点にも繋がります。

またもう一つ大切なことは保護者の理解です。一緒に自然遊びを体験してもらうのも良いでしょう。自然の中で遊び込む子供の姿を捉えた保育者の視点を伝えるのも良いと思います。今回の事業では、保育者も子供を通して自然の良さを感じているアンケート結果もありました。こうした取組を継続的に行う事で理解が深まると思います。

3. 活動報告会の開催

3.1. 活動報告会概要

開催概要

日時	令和3年3月1日 月 18:00 – 20:00
開催方法	オンライン会議ツールにより実施
参加費	無料
対象	東京都内の保育所等に勤務する保育士・関係者、指定保育士養成施設、行政担当者等
定員	300名
主催	東京都（【事務局】株式会社日本総合研究所）

当日プログラム

(※) モデル事業の背景・趣旨説明	東京都福祉保健局
(※) 事業実施内容説明	日本総合研究所
(※) モデル事業の活動報告	モデル事業参加施設
(※) 参加者は事前に収録された上記動画を視聴の上、下記当日プログラムに参加する形とした	
開会	日本総合研究所
モデル事業の活動に対する講評	登壇者：下記参照
パネルディスカッション	汐見稔幸氏 東京大学名誉教授、白梅学園大学名誉学長、日本保育学会会長、一般社団法人家族・保育デザイン研究所代表理事
	関山隆一氏 NPO法人もあなキッズ自然楽校理事長、NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟副理事長、東京都市大学人間科学部非常勤講師
	野村直子氏 (一社) new education LittleTree代表
	山本真実氏 東洋英和女学院大学人間科学部保育子ども学科教授
宮里暁美氏 お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所教授	
閉会	日本総合研究所

3. 活動報告会の開催

3.2. 各園からの活動報告 ①せせらぎ保育園

報告のポイント

- 6名の保育者と園長により、動画や写真を参照しながら、各活動について報告を行った。

	報告のポイント
初回活動について	<ul style="list-style-type: none">• 自然環境における、子供たちの発達に合わせた活動について• 乳児ならではの自然物との関わりの様子
2回目、3回目活動について	<ul style="list-style-type: none">• 近隣の自然フィールドの活用、目的地にこだわらない散歩の在り方について• 子供たちそれぞれが生み出す遊びについて
まとめ	<ul style="list-style-type: none">• 自然を活用した保育を通じて気づいた子供たちの成長、変化• 保育者としての考え方の変化

有識者からのコメント

- せせらぎ保育園の報告に対する有識者の主なコメントは以下の通り。

- 子供の想定外の行動を想定外として受け入れる良さ・意義について保育者が気づいた点が印象的であった。活動回数を重ねるごとに保育者の表情も綻んでいった様子も見られ、今後が楽しみである。
- 保育者としても子供の気持ちを汲み取ろうとする姿勢が見られ、子供のやりたいことの実現につながっていたのではないかと。
- 昨年度の活動時は保育者の動きに若干のぎこちなさが見られたが、本年度は保育者がどっしりと構えて見守ることができており、自然なかかわりができていたのではないかと。
- 道には様々な自然が豊富にあり、子供にとって歩くことは目的地への移動ではなく、むしろ途中の発見などを楽しむものである。今回の活動の様子を見て、「散歩保育」の重要性を改めて感じる事ができた。

3. 活動報告会の開催

3.2. 各園からの活動報告 ②まちの保育園小竹向原

報告のポイント

- 5名の保育者、コミュニティコーディネーター、園長により、動画や写真を参照しながら、各活動について報告を行った。

	報告のポイント
初回活動について	<ul style="list-style-type: none">● 園庭で自発的に自然物に関われるような環境設定● 乳児ならではの自然活用の視点や保育者の関わり方● 乳児の保育における留意事項
2回目、3回目活動について	<ul style="list-style-type: none">● 初めての公園で見られた子供たちの様子● 乳児が興味を持った自然物や自然物との関わり方について● 2回目活動時と比較した際に、子供たちの遊びに広がりが見られた様子● 子供たちとの関わりにおいて保育者が感じたこと
まとめ	<ul style="list-style-type: none">● 本モデル事業を通じた子供たちの成長変化● 保育者としての考え方、自然を活用した保育の重要性

有識者からのコメント

- まちの保育園小竹向原の報告に対する有識者の主なコメントは以下の通り。

- 昨年度も参加しており、保育者の様子は大変落ち着いているように見えた。保育者は子供に何かを教えるというよりも、子供の様子の観察に注力し様々な促しができており、その点で非常に良い空気感があったと思う。
- 保育者は保育の場にいるときだけでなく、保育を振り返った話し合いをしているときも楽しそうであった。保育者が子供とともに楽しむことは非常に重要。また、何通りもの遊びが生まれており、これは子供に遊び方を委ねている結果である。様々なヒントが得られた活動だった。
- 保育者の学びたいという意欲が強く感じられた。また、限られた園庭も活用しつつ、日常の保育とも連動させている点は印象的であり、これは他園でも参考となるのではないか。
- 特に乳児も当たり前のように自然の中で活動している点は見応えがあった。乳児であっても自然と触れ合いながら生活することには大きな意義があり、その重要性を改めて考えさせられた。

3. 活動報告会の開催

3.2. 各園からの活動報告 ③本村保育園

報告のポイント

- 4名の保育者と園長により、動画や写真を参照しながら、各活動について報告を行った。

	報告のポイント
初回活動について	<ul style="list-style-type: none">• 都心部ならではの子供の特性を踏まえた環境設定の工夫• 保育者が意識した子供との関わり方のポイント
2回目、3回目活動について	<ul style="list-style-type: none">• 子供の成長度合いやその日の状況を考慮した適切なりスク管理の重要性• 園庭の活動とフィールドでの活動との使い分け方• 活動を通して感じた子供たちの成長、変化• 活動を通して感じた保育者の意識の変化
まとめ	<ul style="list-style-type: none">• 本モデル事業を通じた保育者としての考え方の変化、今後取り組みたいこと

有識者からのコメント

- 本村保育園の報告に対する有識者の主なコメントは以下の通り。

- 子供たちが楽しく遊んでいる様子を見て、保育者が子供が楽しめる遊び方に気づいたシーンは非常に興味深かった。また、近隣の有栖川公園を活用しているとのことだったが、都市公園の良さとしては、造園されているため四季の移ろいを感じられること。これは大きなメリットなので、他園でも参考になると思う。
- 本村保育園における有栖川公園のように、拠点を定めることも一つ大事なポイント。特定の場所に馴染むことで新たに探究できることや新たな遊びも出てくる。
- 今回は初めての取組だったと思うが、保育者の意識が変わっていく様子が見られた。公立保育園ということで様々なプレッシャーもあったかと思うが、良い意味で緊張感を保ちつつ、殻を破っていかれていたと思う。
- 毎日同じ場所で存分に活動すると、それが子供にとっての原風景となる。本村保育園の取組や有栖川公園の存在はそれを感じさせられた事例であった。これをきっかけに、東京都でもこうした原風景となり得るような環境が、今後整備されていくことが期待される。

3. 活動報告会の開催

3.3. パネルディスカッション①

ディスカッションテーマ

- パネルディスカッションは、汐見稔幸氏をコーディネータとして、以下の3つのテーマについて意見交換、とりまとめいただいた。

- ① 保育の質を高めるための一つの方策・手法としての自然活用、公園等身近な環境・資源の活用方法・留意点
- ② 自然での活動などで保育者が気付きを得るための視点・ポイント、保育者間のコミュニケーション、地域資源の活用・地域との連携
- ③ Withコロナ時代における保育のあり方、効果的な自然の活用の方向性

ディスカッション概要

① 保育の質を高めるための一つの方策・手法としての自然活用、公園等身近な環境・資源の活用方法・留意点

- 保育の質を高めるために有用なのは、周辺環境の確認。周辺環境には自然だけでなく、人や建物など様々な地域資源が含まれる。これを保育者間で可視化して共有することが重要。
- 保育の質が高まっている状態とは、何らか現在の保育のやり方を変えている状態。そして、何かを変えたときに効果が上がりやすいものが、まさに自然の活用である。身近な散歩のやり方を変えるだけでも、そのプロセスを含めて保育の質を高めることにつながる。
- 都内の保育園は、園庭がない園やビルの一画などの保育園も多く、また園内環境も様々。ここで重要なのは「自然を活用する」ということは「何らかの活動をする」ことではないということ。活動をするといわれると、こうした都内の園においては制約を意識してしまいがちである。そうではなく、ありのまま、自分の意思で伸び伸び育つことが大事。そのように子供が過ごしていると保育者が思えるような保育を行うことが求められる。
- 子供たちがどういった心の動きをしているかを保育者が気づき・感じる事が重要。子供が何かを発見しているときなど、保育者も一緒になって体験することで、共感、言葉のないコミュニケーションにつながる。自然を活用するといっても、何かをしなくてはならないということではない。むしろそこにある自然に気づき、感じながら保育をすることを体験してほしい。子供も自然も日々変化しており、決まったやり方はなく、臨機応変に様々受け入れながら保育をしていくことが重要。

3. 活動報告会の開催

3.3. パネルディスカッション②

ディスカッション概要（続き）

② 自然での活動などで保育者が気づきを得るための視点・ポイント、保育者間のコミュニケーション、地域資源の活用・地域との連携

- 自然を活用した保育を行う中では、棒を持ったり、高いところから飛び降りたり、水たまりに入ったりするシーンも多々あるが、そこでできるだけ制止せずに見ていると、子供の遊び方や考え方の面白さが発見できる。丁寧に子供を見ることが大事。地域資源の活用ということに関しては、是非子供が優先して遊べる環境を整備してほしいと考えている。イギリスではこうした考え方が進んでいるが、日本でも今後一層求められていくだろう。
- 保育者が気づきを得るためには、初めは今回のモデル事業における野村氏のような案内人がいると良い。その方法さえ理解し慣れてくれば、自然とアンテナが立ち、「気づくことができる」保育者になる。また、子供に対して情報や知識を与えすぎないことには留意する必要。これは子供の気づきを阻害する要因にもなり得る。
- 保育士を目指す学生でも最近では自然に関心がない者が多いが、これは乳幼児期の体験が少ないためである。このように子供のときに自然と触れる体験は、その後も長期的に影響することにも、留意しなければならない。地域資源の活用に関しては、保護者にもその内容を共有しつつ、関係者全体で取組むことが必要である。
- 自然の知識がなくとも、自然の変化を楽しむことはできる。保育者自身が自然を感じることは重要で、例えば敢えて自然の「気持ち悪さ」なども体験することがリスクマネジメントの視点や、自然が苦手な子供に寄り添う気持ちを育むことにもつながることもある。
- 地域との連携という意味では、散歩中や公園での活動中の他園との交流も、子供にとっては様々な他者とのかわりを持つ良い機会。こうしたこも是非活用してほしい。
- 保育者のアンテナを立てるという意味では、まずは小さな体験をやるということに加え、自然の知識、自然の摂理の構造を学ぶという方法もある。保育者自身が学びにより新鮮な驚きを感じ、感性が開いてくることもあるのではないかと。

3. 活動報告会の開催

3.3. パネルディスカッション③

ディスカッション概要（続き）

③ Withコロナ時代における保育のあり方、効果的な自然の活用の方向性

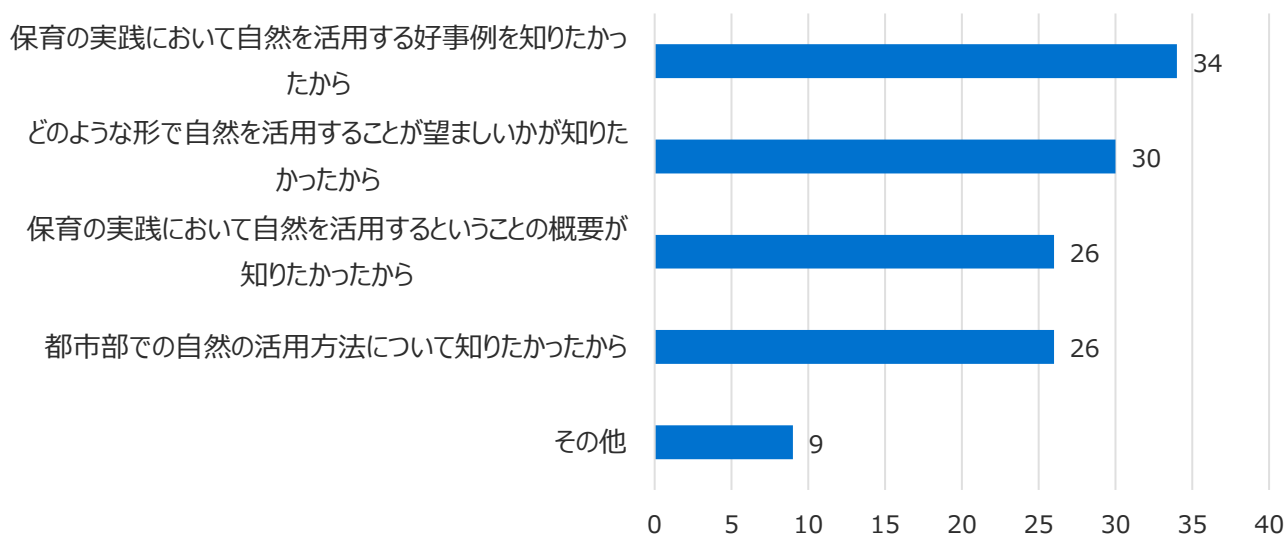
- 昨年5月頃の緊急事態宣言下においては、子供と父親が近隣の公園に虫取りに行く光景がよく見られた。改めて、子供と遊ぶ機会などが増え、一緒にいる時間を共有することで、その大事さを再認識する機会になったのではないか。また、遠出ができない状況によって、地域資源の有用性・可能性も同時に再認識することができ、自然との触れ合いは大自然に限らずとも可能であることが分かったのではないか。
- コロナ禍の対応という意味ではオープンエア、つまり野外は密から避ける唯一無二の方法である。また、手洗いが推奨されている状況だが、自然の土の中には悪い菌だけでなく良い菌もたくさん存在している。本来であれば子供にとって泥だらけになって遊ぶことはプラスの面も大きく、そうした観点からも阻害されるものであってはならない。ポジティブに言えば、こうした保育のあり方を考え直すことができたある意味で良い機会だったのではないか。
- 様々な人にとって当たり前だったことができない状況となり、改めて「当たり前」の大切さを感じられたと思う。
- コロナ禍では、ともすれば家庭内で一日中テレビを見ているだけの子供もいるであろう中で、保育園では保育者の尽力により日常の生活に近い活動ができています。そういった意味で、保育園の価値を再認識した。一方で、狭いビルの一室でほとんど窓がない中、数十人の子供を保育している環境も存在。是非今後はこうした環境を見直す取組が進んでいったら良いと思う。
- 自粛期間中でも園庭がなく毎日外出している園もあり、その園の保育者からは、やはり自然の中にとると平和を感じられる、という声があった。自然は保育者もリラックスできるという効果があるということも改めて認識。
- コロナの影響で、人間の中にある深い願いが浮かび上がってきたのだと思う。内なる自然が外部の自然を求めていることが分かったのではないか。自然の表し方として、五行説の「木火土金水」と陰陽道の「日月」によるものがあるが、東京のような都市では、改めてこうした自然の見方を考えてみても良い。是非今後の取組に活かしてほしい。

3. 活動報告会の開催

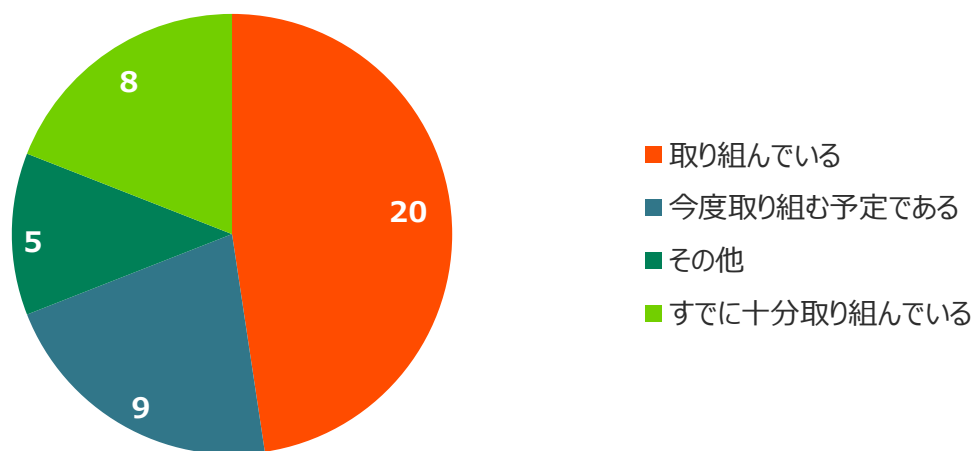
3.4. 参加者アンケート結果①

- 活動報告会への参加動機としては、「自然を活用した保育活動の具体的な事例を知りたかった」が特に多い。
- 参加した保育所等における自然活用への取組状況としては、大半が「ある程度実施している」との回答となった。

活動報告会参加動機 (n=47) (複数回答)



自然活用への取組状況 (n=42) (単一回答)

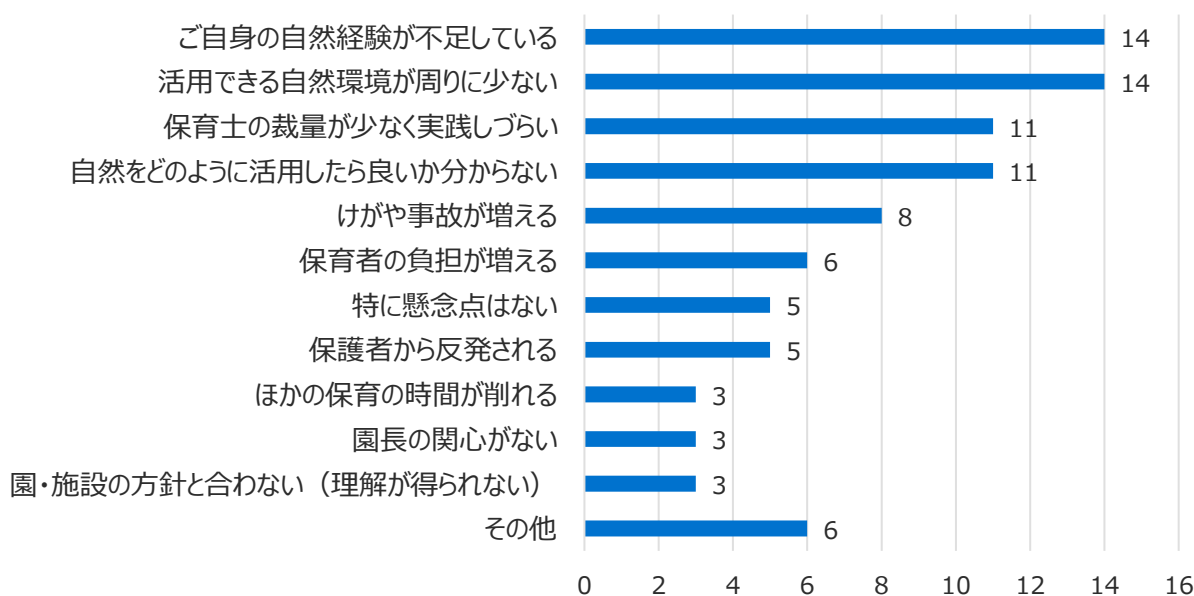


3. 活動報告会の開催

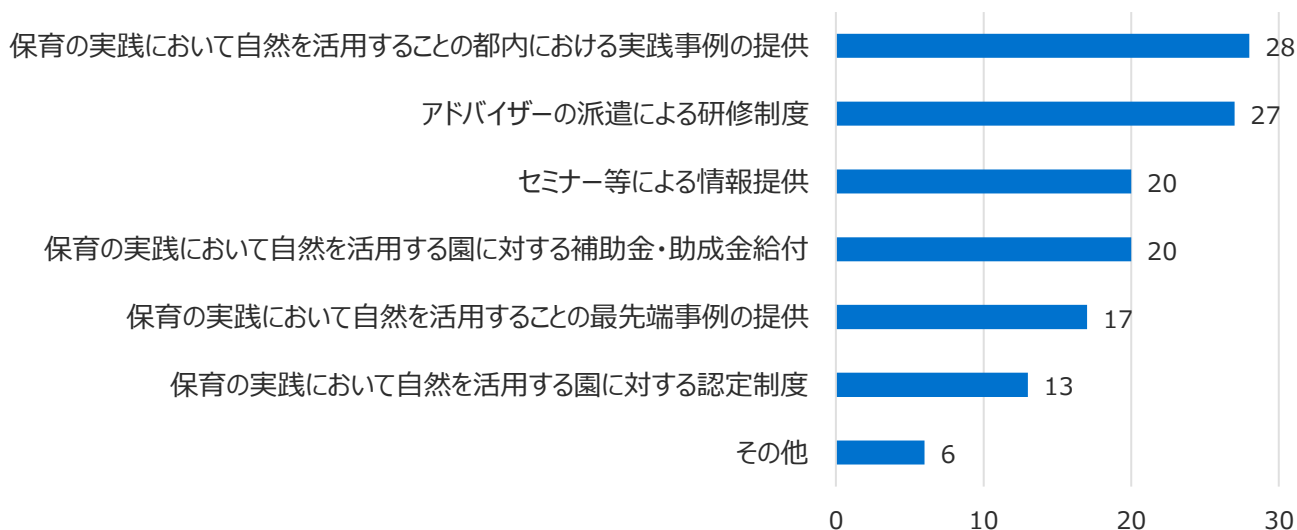
3.4. 参加者アンケート結果②

- 自然の活用に向けた課題・不安としては、「けがや事故の不安」、「活用できる自然環境が周りに少ない」、「保育者の裁量」、「自然の活用方法」が上位となった。
- 東京都等の行政への要望・期待としては、「自然を活用した保育活動の具体的な事例の提供」、「アドバイザーの派遣による研修制度」が上位となった。

自然活用に向けた課題・不安 (n=38) (複数回答)



行政への要望・期待 (n=42) (複数回答)



4. モデル事業を踏まえたまとめ

4.1. モデル事業の成果・課題

モデル事業を通じて得られた成果

- 2年間にわたって実施した本モデル事業においては、2.4.および2.5.で記載の通り、以下のような成果や示唆が得られた。

<自然を活用した保育の効果・示唆>

- 子供の主体性や表現力、リスク管理能力等の変化
- 保育者の自然の活用に関する考え方、子供に対する接し方等の変化
- 安全面への配慮についての認識共有等の重要性
- 乳児への導入による運動機能や感覚機能の向上等の効果、安全管理の方法等
- 都心の保育所への導入による運動機能の向上等の効果

<本活動の継続による効果・示唆>

- 継続的に活動を行うことで、より一層主体性や創造性が発揮されることに資する可能性
- 普段の活動場所よりも自然が豊かな場所での体験が、日常の活動場所での遊びの広がり等に資する可能性
- 様々な経験により、素材の特性に対する理解やアイデアの引き出しが広がる可能性
- 継続的な活動を通じた自然物の生態サイクルや日々の言葉遣いに対する意識の変化

モデル事業を通じて確認した疑問、不安・懸念点等

- 一方で、モデル事業を通じてのヒアリング、意見交換、保育者へのアンケートなどからは、自然を活用するうえでの主な不安、懸念として以下のような点が挙げられた。

- ✓ 周囲の自然環境が不足している
- ✓ 現状の自然環境をどのように活用していけば良いかよく分からない
- ✓ 保育者の自然の活用に関する知識や経験が不足している
- ✓ ケガや事故のリスクが不安、安全確保のために十分な人員の確保
- ✓ 保護者の理解が得られるか
- ✓ 自然の活用を保育の質の向上にどのようにつなげることができるのか

- 活動報告会において実施した参加者アンケートにおいても以下のような回答が得られている。不安・懸念点は概ね同様のものとなったが、行政への要望・期待事項として研修や事例の提供など、周知・理解促進の取組が上位となっており、不安・懸念の払しょくのための情報提供が期待されている可能性が示唆される。


- ✓ 自然の活用に向けた課題・不安としては、「けがや事故の不安」、「活用できる自然環境が周りに少ない」、「保育者の裁量」、「自然の活用方法」が上位
- ✓ 他方、行政への要望・期待としては、「自然を活用した保育活動の具体的な事例の提供」、「アドバイザーの派遣による研修制度」が上位

4. モデル事業を踏まえたまとめ

4.2. 自然を活用した保育のさらなる促進に向けて

楽しく実践するためのヒント事例集

- 本事業においては、前述のような不安や懸念を解消し、自然を活用した保育を取り入れるきっかけとすることを目的として、「自然を活用した保育を楽しく実践するためのヒント事例集」を本活動報告書の別冊として作成した。
- 具体的な事例も交えつつ、自然の活用に関するヒントを盛り込んでおり、是非本ヒント事例集を参考に、日常の保育活動の中での取組のきっかけとしていただきたい。



自然を活用した保育を “楽しく実践”するための ヒント事例集

東京都福祉保健局

令和2年度

「自然を活用した東京都版保育モデルの検討に係る企画・運営等業務委託」
検証委員会

1. 自然を活用した保育って？ 「基本スタンス」

自然の活動（遊びや方法）を提供しなくてもOK！
身近にある“自然”に気づくことから始まります。

- ▷ 日常にある自然への気づきがあれば、保育に繋がります
- ▷ 周囲の地域環境を知ること活用できるようになります
- ▷ 子供の気づきや発見に寄り添う保育者の姿勢が大切です

自然は身近に存在…

- ・ 窓から入る光や風も自然
 - ・ 子供達が持ち帰った自然物は部屋に飾ったり、遊びの素材にも
- <練馬区・まちの保育園小竹向原>



自然物を素材として捉える

子供が持ち帰ったものを飾る



自然の中で 子供主体の保育に

- ・ 自然に触れている子供たちが「今、何を感じているか」を捉える保育に
 - ・ 結果として“子供が主体”の保育”へ
- <練馬区・まちの保育園小竹向原>



【参考】

有識者会議の構成メンバー・開催概要

有識者会議メンバー

汐見稔幸氏	東京大学名誉教授、白梅学園大学名誉学長。日本保育学会会長。一般社団法人家族・保育デザイン研究所代表理事。専門は教育学、教育人間学、保育学、育児学。保育・幼児教育関連の著書多数。
関山隆一氏	NPO法人もあな自然楽校理事長。1998年ニュージーランドに渡り国立公園にて現地ガイドとして働く。2004年に帰国後アウトドアオペレーターの事業を立ち上げ、2007年もあなキッズ自然楽校設立。森のようちえんや自然体験活動を通して、長期的な子育て支援環境の確立及び地域に根差した実践を行っている。NPO法人森ようちえん全国ネットワーク連盟副理事長として、日本の森のようちえんの普及活動に力を注ぐ。東京都市大学人間科学部非常勤講師。
山本真実氏	東洋英和女学院大学人間科学部保育子ども学科教授。東京都児童福祉審議会委員。大学卒業後、10年間のシンクタンク勤務にて厚生労働省を始め官公庁、東京都等地方自治体関係の調査研究に従事。2001年より淑徳大学、2008年に東洋英和女学院大学人間科学部に移り現在に至る。専門分野は児童家庭福祉政策。
宮里暁美氏	お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所 教授。文京区立お茶の水女子大学こども園園長。平成28年4月開園した文京区立お茶の水女子大学こども園園長として園運営に携わり、「つながる保育」を主軸に置いた教育・保育活動を展開する。豊かな体験を生み出す環境作りを進めるとともに保育者の援助について検討し、こども園の教育・保育課程を作成、発信する。幼児と環境の関わりに関する著作多数。
野村直子氏	(一社) new education LittleTree代表。「子ども」と「自然」をキーワードに、国内外での保育と自然体験活動などの経験を重ねてきた。自然学校や小規模保育室園長などの経験を生かし、国内外の保育園・幼稚園研修、講演会や親向けの子育てワークショップなどを行い、保育アドバイザーとして活動中。また、園の運営者・保育者・親向け個人コンサルティングなども行い、それらの活動を通して、新しい保育・教育の視点を提案・提供している。

開催実績・検討内容

回	開催日程	検討事項
第1回	令和2年7月30日（木） 17：00～19：00	<ul style="list-style-type: none">令和元年度事業の振り返り令和2年度の実施内容・要検討事項について 等
第2回	令和3年1月28日（木） 10：00～12：00	<ul style="list-style-type: none">事業実施状況の共有・確認自然を活用した保育促進のための情報発信方法の検討自然を活用した保育促進のためのチェックリストの検討 等
第3回	令和3年2月18日（木） 10：00～12：00	<ul style="list-style-type: none">本年度モデル事業取りまとめのポイントの共有自然を活用した保育促進のための情報発信方法の検討定量的な効果検証の手法についての検討 等
第4回	令和3年2月26日（金） 15：00～17：00	<ul style="list-style-type: none">活動報告会の実施概要自然を活用した保育促進のための情報発信方法の検討 等
第5回	令和3年3月18日（木） 17：00～19：00	<ul style="list-style-type: none">自然を活用した保育促進のための情報発信方法の検討活動報告書の検討 等

自然を活用した東京都版保育モデル活動報告書

令和3年3月発行

編集・発行 東京都福祉保健局少子社会対策部保育支援課
〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
電話 直通 03(5320)4129

印刷 株式会社日本総合研究所
〒141-0022 東京都品川区東五反田2-18-1
大崎フォレストビルディング

